

島崎藤村の言文一致考

On “The Unification of Spoken and Written Language”

by Toson SHIMAZAKI

伊藤 淑人

キーワード

言葉 文章 写生 国語 教育

要約

島崎藤村の詩人から散文家への転身を、文学論の側から考察した。詩の創作から文学に出發した藤村であるが故に、言文一致の文章改良には、少々遅れを取った。だが、信州小諸に移り住み、雲の観察記録や千曲川の自然と生活風景のスケッチから、自らの新しい文章を築きあげる。そこには「観る」「書く」という独自の理論があった。晩年には、この文章論から、国語・言語の教育にまで論究することになる。島崎藤村が、生涯をかけて求め続けた言葉論や文章論を解析し、論じた。

明治・近代文学の社会的功績のひとつに、二葉亭四迷、山田美妙、尾崎紅葉等の、文章改革、言文一致運動を挙げることが出来る。二十代の若者達が、今日に至る新時代の日本の文章を、一気可成に築きあげたのである。

だが振り返って見れば、言文一致運動とは言うが、その源泉は『小説神髓』⁽¹⁾にあり、ここで坪内逍遙が、近代文学理論を提唱し、小説の写実を高らかに説いたところにある。あの名高い小説の主眼は人情なり、世態風俗これに次ぐ。人情とはいかなるものをいふや。曰く、人情とは人間の情慾にて、所謂百八煩惱是なり。〈只傍観してありのままに模写する心得にてあるべきなり〉と展開した、文章、写実論は画期的であった。この小説論に大いに感動し、坪内逍遙の門を叩いたのが、二葉亭四迷であり、自らも「小説総論」⁽²⁾という論文を書いて見せた。『小説神髓』とは、比較にならないほど小さな規模の、短い論文であるが、その〈模写といへることは真相を仮りて虚相を写し出す〉ことという指摘は、当時の小説論として卓抜している。坪内逍遙の『小説神髓』は、偉大な小説作法論だが、ともに書かれた小説『当世書生気質』⁽³⁾は、それらの理論を全うできてないという今日の評である。逆に、二葉亭四迷の場合は「小説総論」よりも、実作品『浮雲』⁽⁴⁾のほうが、文章、内容の画面に於いて新しく、理論をはるかに凌ぐ秀作である。二葉亭四迷は、ロシア人教師がロシア語で行う講義を直にノートするという学生生活を送った。その経

験から、三遊亭円朝の落語を筆記し、新しい文章を確立して『浮雲』を書いたといわれている。そのことについて、二葉亭四迷は、『余が言文一致の由来』⁽⁵⁾で、次のように回想している。

もう何年ばかりになるか知らん、余程前のことだ。何か一つ書いて見たいとは思つたが、元来の文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで、坪内先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は円朝の落語を知つてゐよう、あの円朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。

で、仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京弁だ。即ち東京弁の作物が一つ出来た訳だ。早速、先生の許へ持つて行くと、篤と目を通して居られたが、忽ち腕と膝を打つて、これでいゝ、その儘でいゝ、生じつか直したりなんぞせぬ方がいゝ、とかう仰有る。

この回想文によれば二葉亭四迷は、文章を書こうと思うが書けない、そこで坪内逍遙を訪ねたところ、円朝の落語通りに書いて見たらと助言してくれたと言う。二葉亭が、落語の筆記から言文一致の文章を確立したという有名な話は、実は、坪内逍遙の示唆であつた。続けて、言文一致運動でよく言われる「です・ます体」「だ体」「である体」については、このように述べている。

暫くすると、山田美妙君の言文一致が発表された。見ると、「私は……です」の敬語調で、自分とは別派である。即ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ。後で聞いて見ると、山田君は始め敬語なしの「だ」調を試みて見たが、どうも旨く行かぬと云ふので「です」調に定めたといふ。自分は始め、「です」調でやろうかと思つて、遂に「だ」調にした。即ち行き方が全然反対であつたのだ。

その後も二葉亭は、山田美妙等の文章を読み、考慮しながら、自らの文体を確かなものにしていったということがわかる。これらの文章から言文一致運動は、確固とした理論があつて出来たものではなく、いろいろな試みによって、また、地味な努力を積み重ねて完成したのである。

このように華やかな文章改良運動の最中、藤村は詩作に熱中しており、詩という文学形式の日本的確立をめざし奔走していた。自らの同人誌『文学界』を主な舞台として、詩作品を発表し、かたわら詩の理論について思索を巡らした。

藤村の詩作は、明治二十年代中頃から始まるが、東北仙台に教師として赴任してからが、本格的な活動期と言えよう。周知のように、四つの詩集『若菜集』『一葉集』『夏草』『落梅集』は、明治三十年から明治三十四年にかけての四年間で書き、上梓されたものである。初期の詩論には『若菜集』刊行以前に書かれた「韻文について」⁽⁶⁾という論文がある。「韻文について」は、日本語は詩に適しているかどうか、日本語で詩を書けるか、日本語で詩を書くためには、という激しい問い掛け、煩悶である。それは新しい近代日本の詩を作るための、今ふうに言えば、詩的言語と

しての日本語の検証と確立を目指した論文であった。次ぐ詩集『落梅集』には、名作「小語なる古城のほどり」「椰子の美」「千曲川旅情の歌」が所収されている。だが、その一方で、空の雲の変化を詳細に観察記録した「雲」、海辺の紀行文「利根川だより」、音楽的要素からの詩論「雅言と詩歌」など優れた散文、理論文が多数含まれている。藤村は、長野県の小諸地方に移り住み、そこで『落梅集』所収の詩編を書きながら、詩から散文への移行の準備をしていた。このことは第一詩集『若菜集』より、第四詩集『落梅集』のほうが、表現、内容ともに、散文に近い感じがするところからも窺える。そして、藤村の小諸での雲の記録は、千曲川周辺の自然と人々の生活という日常の観察記録となり、その後、スケッチ風な文章『千曲川のスケッチ』となって出版された。藤村の小諸生活は、詩創作と文章創作が交錯しあつた時代である。二葉亭四迷は、落語の筆記によって新しい自分の文章を会得し、島崎藤村は、雲の観察記録、現実性の強い紀行文、自然と生活風景のスケッチで新しい文章を作り上げた。これらは、独立した優れた文学作品となっているが、詩から散文家へという道に於ける藤村の並々ならぬ根気力、集中力、努力を窺えると同時に、学ぶべき文章修業の一つの良い方法であると思われる。

当然のことながら、詩の創作を断つた藤村は、詩についての理論を追求することを断つた藤村である。同じく、小説創作を志した藤村は、文章理論、小説作法の確立を志した藤村であった。この時期の藤村を研究することは、詩と文章と小説作法理論の関係を解明する有力な手掛かりになるであろう。

それでは、まず詩人として高い到達点を示した藤村が、なぜ散文・小説へと移ろうと決意したのかについて考察してみる。その内部事情について「緑蔭雑話⁽¹⁾」という談話の中で、このように語っている。

小説が私の思想を現すに最も相応しい形だと思ふから小説を書くので、韻文の方を止めたと云ふのではなく、進んで来て恁んな所へ出たのだと思つてゐます。近頃韻文から散文に移つた人が大分ある様ですねえ、皆韻文では其思想を云ひ現すことが出来なくなつたのでせうよ。然し私は韻文が悪いと云ふではありません。蒲原君などの新体詩をやつて居るのも——勿論違ふけれど、或意味に於ては私などが小説を書いて居るのと同じことだらうと思ふのです。

ここで藤村は、詩を書いた結果、小説のほうが、自分の考えを表すに相応しいと思うようになったのであり、決して、詩という文学スタイルの問題ではないと言う。また、蒲原有明などが、詩を書き続けているのは、詩のほうが自分の思想を表すに良いと考えているからであろう、と述べている。本格的に小説を書き始めてから、全く詩作を止めてしまった藤村であり、今日の評家からは、詩人としての藤村の限界とも、詩という文字形式の限界とも言われているが、もっと自然な形での移行であつたようである。一般的には、藤村、国木田独歩、室生犀星など抒情詩人は小説に転向してきたが、蒲原有明、萩原朔太郎、北原白秋など象徴詩人は、小説家に転向していないという傾向がある。藤村の詩は比較的小説に移行しやすい形の詩だつたと思われるが、それでも

大変な苦しみであった。

このように、詩から出発した藤村であったが故に、明治初期に起こった新しい文章運動に対しては、準備期間を充分に取る必要性があり、一步も二歩も出遅れる結果となった。この文章改革運動について、藤村は論文「言文一致の二流派」⁽⁸⁾を書き、そこで次のように述べている。

言語の愛はやがて其知識を産むのである。今日迄の言文一致は言語を愛する人々の手に依りて開拓された。将来の言文一致も、亦、左様いふ人々の熱心を待つて発達するのであらう。

ある人は斯いふことを云つた。在来の文章に用ひてある言語はあまりに使ひ古されて、殆ど無意義に成つた趣がある。斯うなると言語も甚だ窮屈なもので、心で言はうと思ふことの符牒には成らない。言語は符牒だ。其符牒を通して心を伝えるのだ。だから、其を新しい意味に活用して、自由に思ふことを言ひ表し、昔の人に無かつた心地をも伝えるのが今の文学者のつとめである。

言文一致の発達、恐らく、斯ういふ新時代の精神の活動であらう。

文体と思想とを取離して言う人もあるが、吾儕は取離すことの出来ないものと思つて居る。その抱き合つたところに、人々の性質や特色が顕れるのである。其例は翻訳なぞを見ると克く解ることで、譬へば同じ原作の意味を伝えるにしても、ある人は荘重な雅文を用ひるし、ある人は苦渋な言文一致を用ひる。創作の場合が矢張其だ。言文一致の自由な形式を取るとは、既にそれ自身新しい思想と言つてよいのである。

ここで藤村は「言文一致は言語を愛する人々の手に依りて開拓」された。そして在来の言語は、使い古され無意義になっているが、言語は符牒（注し合図のための隠語）であり、その符牒を通して「心を伝える」のだから、言語を新しい意味に活用して「自由に思ふことを言ひ表し」「昔の人に無かつた心地をも伝える」のが文学者の務めである。そして「文体と思想」は取り離すことは出来ない、その「抱き合つたところに、人々の性質や特色が顕れる」、従つて「言文一致の自由な形式を取ることは、既にそれ自身新しい思想」と述べている。藤村は、言文一致は新しい意味を言語に活用させるということを背景として起こった運動であると考ええる。

続いて藤村は、言文一致の歴史を振り返り、山田美妙を中心として文体改良は始まったが、尾崎紅葉と二葉亭四迷の二氏が、最も多大な貢献をしている、と言う。まず、尾崎紅葉について、このように語っている。

あの「多情多恨」なぞの中に顕れた紅葉氏がスタイルの選択、熟語の研究、語勢の注意、其他江戸ツ子に通用な美質——弁舌の豪気と華麗な神経質とは、長く言文一致の歴史を飾るのであらうと信ずる。

紅葉の文章のスタイル、言語とその語勢、弁舌の豪気さなどに特徴を見出す。この批評は、

紅葉の文章の、勢い、力強さ、リアリテイを讀えたものであろう。そして、二葉亭四迷については、このように見ている。

紅葉氏がスタイルに重きを置いたのに反して、二葉亭氏は自然の真を得るといふことに力を傾けて居るらしい。二葉亭氏が言文一致の上に試みた調とか語勢とかは、氏の目的を達する上に於いて、美しい結果を取めた。(中略) 日常の言語が克くあれだけの感情を伝へたものと驚いたのであつた。一度「片恋」の中に納めてある諸篇を讀んだものは、二葉亭氏が言文一致に於ける異常の苦心と熱意とを認めるであらう。

藤村は、紅葉の文章改革が比較的⁹⁾に外面の描写のみに留まつたに對して、二葉亭の文章は〈真を得る〉〈目的を達する上に於いて、美しい結果〉を取めたと言う。そして、日常の言語でよくあれだけの感情を表現できたものと驚き、二葉亭四迷の言文一致に於ける〈苦心と熱意〉に賛辞を送る。藤村は、この論文の最後に〈諸君は言語を愛するといふ心を抱いて、研究の途に上られんことを切望する〉と述べている。藤村の言文一致に対する考えは、言語——文章——思想は一つであり、それは〈言語の愛〉によつて支えられ、成り立つ。自由な形式をとる言文一致運動そのものが、すでに新しい思想だと言うものである。

その後、藤村は「口語と詩歌の一致について⁹⁾」という短文を書き、散文家の側から、言文一致にともなつて勃興してきた、口語歌、口語自由詩の文字運動に對して一言している。

そこで〈言文一致とは、必ずしも言詩一致、もしくは言歌一致と同じ意味のものではない〉。山田美妙は、散文だけでなく詩も試みたから、特に〈言文一致が散文のために創始せられたわけではなかつた〉かも知れないが、二葉亭四迷は、主として散文で〈いかにせば言葉と散文とを一致させ得るか〉ということであつた。今から見ると〈言文一致の文体なるものが散文に適合して居るやうではあるが、その発達にはかなり長い歴史〉がある。だから、この言文一致の文体の組織が〈そのまま、詩歌に応用し得るか、どうか。それが私には疑問だ〉。もし〈直ちに詩歌の上に移さうとしたとするならば、その人の書いたものは勢ひ散文的に流れないわけにはいかないだらう〉と言う。そして、今日の詩人に取つて〈言詩一致、もしくは言歌一致といふことに、多くの散文家が費したとはまた別の苦心と努力とが必要になつて來ると思ふ〉と述べている。つまり、言文一致運動は、言葉と文章をいかに一致させるかということであり、それは果てしない苦心の末に成功した。しかし詩歌の場合は、それだけでなく、常に、言葉の美感というものが重要となつてくるから、散文に於ける言文一致運動とは、全く同じようなわけにはいかないと言つてあろう。

さりげない短文であるが、詩人から散文家の転身に苦闘した藤村の深い洞察が感じられる。以降の近代の詩人は、この藤村の忠告に對して、真摯に向きあい、格闘することとなる。

これらの言文一致に対する考察は、小説執筆後に、確実に小説の描写論につながっていく。藤村が、坪内逍遙の『小説神髓』に於ける「写実」を、どのように受け止めたかは、定かではないが、藤村自身は「写生⁽¹⁹⁾」という論文の中で、写生についてを、次のように語っている。

物を観るといふことは左様容易くは出来ない。例へば深山に炭焼の煙の立ちのぼるのを眺めるにしても、そこに生死する人があると心着く迄には、多少物を観る稽古が要る。この『物を観る稽古』として、自分は写生の方法を採つた。だから自分の写生は、丁度大家の手本を離れて生物に就く画家と同じやうに、先づ局部を視るといふことから始めて——また始めから物の大体を視るといふことは無理だから——それから次第に其物の『真』を得るといふ方へ近づかうと心懸けたのであつた。

藤村の「写生」は〈物を観る〉ということに原点を置いての絵画的なものであり、それは単に写生するのみでなく、物事の奥にある〈『真』〉に近づくことであると言う。続けて藤村は、このように述べている。

一時私は写生帳を作つて、日記風につけて見た。期して物を観る稽古をするうちに幾度か念頭に浮んだ疑問は、『自分は果して物の自然を写して居るだらうか』といふことだつた。ある時はあまり解剖的に成り過ぎて、活きた物を死物のやうに扱つて居たやうな場合もあつた。思ふに、こちらに生氣のある時でなければ、真に『生』を写すことは出来ない。ミレエは、『物事は常に其根本から観ねばならん、爰が唯一真正の地盤である』と言つて居るが、物を根本から観て、それから自由に其枝葉に涉ることが出来るやうになれば、それが写生の極致だらう。

ここで藤村は、写生の練習のため写生帳を作り日記風につけてみたが、そのとき〈活きた物を死物のやうに扱つて居た〉こともある。自分に〈生氣〉のある時でなければ、真に〈生〉を写すことは出来ないと言う。つまり、自然を捉える側、人間の精神のあり方を重視する。そして画家ミレエの、物事は常に〈其根本から観ねばならん〉という言葉を引き、藤村は、物事を〈根本〉から〈自由に其枝葉に涉る〉ことが〈写生の極致〉と述べている。さらに「写生」の方法を、要点よく次のように纏めている。

第一には能く物を観ること、第二には能く物を記憶することだ。

第一期には『すべての物は自然である』と思つた。第二期には『すべての物が自然であるとは言はれない、世には不自然な物が多いではないか』と斯う思ふやうになつた。

そして再度、ミレエの言葉を引いて、このように「写生」について説いている。

自然界の物は如何なる微細なものでも、性格を有つて居る。彼の暖炉でも、窓の台に載つて居る書籍でも、自分から見ると偉大な性格を有つて居る。

同じ人の言葉に『森を描く時には、あの光る葉や暗い影が、人の心を動かし、喜ばせる、其力を表現したいと思ふ』とある。同じ自然を写生するにしても、私は矢張り斯ういふ心地で進んで見たいと思つて居る。

ここで藤村は「写生」は、よく観て記憶することだ。すべての物は、自然であるがすべて自然とは言われない、実は不自然な物が多い。また、いかなる微細なものでも性格を持っている。森という自然も、光る葉や暗い影が、人の心を動かし喜ばせるのであると論じている。藤村は、ものを観るということ、よく観て事物の奥に潜む物を穿つということ、と「写生」の奥行き、深さを説き、多彩さを強調する。これらの「写生」論には、ミレエではなく、セザンヌの「自然は内にあり」という言葉を想起させるものがある。「写生」「スケッチ」は、その根幹に於いて文章も絵画も同じだということであろう。この論文の最後に、藤村は〈稽古としての写生は研究だ。研究はもとより大切な。しかし研究といふことを忘れた時でなければ、真の好い写生は出来ない〉と述べている。つまり、写生は観察であり、観察するということは研究に通じるが、しかし、研究を忘れるほど写生を身につけ、体現しなければ、真の写生の境地に達することは出来ないということであろう。

そして、先に〈写生帳を作つて、日記風につけて見た〉と言っていたが、続く「日記⁽¹⁾」という短文に、このようなことが書かれている。

私は青年諸君に——殊に文学に志す青年諸君に忠実な日記をつけることを勧める。強ひて自分の思想を、作物とか、ある纏まつた形とかに盛るといふことは考へ物だ。独歩君の日記、一葉女史の日記等は、作を成す上に、観察の上に、深き素地をなしたものだと思ふ。

藤村からの〈文学に志す青年諸君〉に向けてのメッセージであり、それは〈忠実な日記〉をつけること、自分の〈思想〉を盛るのではない〈観察〉の日記だ、と言う。繰り返してきたことだが、この助言だけでなく、この期の藤村そのものを学ぶことが、文学、特に文章修業の良い道であり、方法と思われる。さらに、この「観る」「写生」について、続く論文「観ること書くこと」⁽²⁾で、その必要性和効果を重ねて説いている。

吾儕が物を観る場合には、多くは先人からのある定まつた観かたに拠るものであるから、左様いふ先人主と成つた観かたを離れて物を観るとなると、必ずそこには何人も未だ気付かずに見逃して置いたことの発見せらるゝものである。(中略)物を観るといふことに依つて、自己の革命を企て、新しい進路を開いて行つた人は少くない。

前出の論文で、藤村は〈観る〉ことの大切さを示したが、ここでは、さらに一步踏み込んで

〈定まった観かた〉から離れて〈観る〉ことによって、新しい〈発見〉ができ〈進路を開〉くことができると言う。一般的な言い方をすれば、いわゆる、先人観に捉われない観かたに新発見があるということであろう。続けて、次のように述べている。

総てありのまゝに來て影を投ずる明るい鏡のやうな心を持ちたい。是は難いことだ。何故といふに、一度吾儕に映じた影は、鏡の如く拭ひ去られるものでは無いからである。

先人主に成つた考を離れて物を観ようといふやうな態度を押し詰めて行つたら、その人は奈何なるだらう。冷然として自己の破壊に対する観察者の運命こそは傷ましい。あるひは一種の社会観を作つて、自己の観察を統一せずにはいられないやうな人も出来て来るのではあるまいか。(中略)そこで、斯の物を観るといふことが、それを押進めて行く人には、極めて特有な世間観を抱かせるやうな場合も出来て来る。

換言すれば、ありのままに写す〈明るい鏡のやうな心〉で、先人観を離れて〈物を観る〉態度によって〈一種の社会観〉を作り〈自己の観察を統一〉する。そこから極めて〈特有な世間観〉を抱かすことが出来ると論じる。藤村の、物をよく観るといふ写生論は、先人観を離れて観て、そこから新しい社会観・思考の構築するという理論に到達する。この先人観を離れる、過去を断つ、という思考は、単なる写生論のみでなく、明治という新しい時代の到来、近代日本の思想建設にとって必要であった。

時は遠く、遠く流れて昭和十四年、晩年の藤村は、綴方の全集に「序のことば」として、「すなほな心⁽¹³⁾」という短文を寄せ、初心者が見習うための心得を説いている。

ここで藤村は〈物の生命に触れる力〉は何かと問うならば、それは〈すなほな心をもつこと〉である。文章の門に入ろうとする人は、この〈すなほな心で物を書く〉ことで、素直に〈思つた通り〉〈正しく人に伝えられ〉たら、実に〈楽しい〉ことではないか。また〈言葉の感覚には敏く〉ありたい、そのような言葉で〈生きく〉と物を書くやうに心掛けたい。そのためには〈物の生命に触れ〉る必要があり、それは〈すなほな心〉がなければ叶わないこと、と言う。そして、この文章論は、人間、人生論にまで及ぶ。つまり、優れた古人は〈最後まですなほな心を持ち続けた人達〉で、それには〈自分の持つものを粗末にしない〉ことである。同じように〈どんな人でも自分に持つて生まれたものゝない人はない。それを粗末にしないところから出発するこそ、年幼い人達のつとめではあるまいか〉と論じている。

藤村は終生、「すなほな心」で、言葉を見つめて詩を書き、心を研いて観察記録をつけ、心暖まる風景スケッチを綴り、心を凝視して小説を書いた人であった。晩年に藤村が至り着いた文章上達の極意は、実に「すなほな心で書くこと」であった。

さらに二年後、最晩年の昭和十六年には、国語教育に対する「国語問題覚書⁽¹⁴⁾」という長文を

『国語文化講座』に掲載している。

そこで、はじめに〈言語を文章に写さうとくろざし初めてから、自分には最早長い年月が経つ〉、私たち作家の目指すところは〈広い意味での言葉の解放にあつても、学問的にこれを究めるといふ各方面の諸家が研究〉を待たなければならない。だが、私が〈国の言葉に対する認識を堅めたい〉と思うようになったのは、過ぐる〈三年間の佛蘭西の旅〉によってであり、その旅で〈しみぐ国語の愛を自分に喚び起した〉と言う。

そして、藤村は本題に入り、先学の国語研究で注目するのは、小池直太郎の、俳諧師または狂歌師の手に成る、俚言、方言、江戸語の類、それらが訓詁注釈に満足せず、比較考証にまで進んだこと。ドイツ生まれの蘭医シーボルトが、日本語は〈文化の高い記号である〉と指摘したこと。シーボルトは〈最も早く日本語に注意を向け、基礎的な学問の方法でこの国の言葉の特質を考へた欧羅巴人の一人〉であったことを書いている。さらに、私達が〈言文一致をくろざした頃にも、言語を文字に写す方法の探究にまでは手が届かなかつた〉、国語の問題を考えるにあたり〈出来るだけ言語と文字とを一致させるやうにしたら国語の教育ももつとずつと早く出来上らう〉。また言葉について〈ある言葉は一時流行し、ある言葉は徐々に移り変わり、ある言葉は死語となつても別の意義を持つて生き返り、ある言葉は長く歴史的な生命を保つ。どうしてこの言葉そのものがさう扱ひ易からう〉と述べている。詩創作や言文一致で、言葉と格闘した自己の経験を背景として、国語について語っている。

続いて、藤村は自ら同席した、長谷川如是閑、谷川徹三、金田一京助との「国語国字の諸問題」という座談会について取り上げる。そこで、長谷川如是閑が〈文章の移り変わる前には先づ言語が移り変わる、文章が非常に変化する時には先づその前に言語が変化してゐる〉と言ったこと。金田一京助が〈人倫関係の細かさを複雑な語彙で言ひ表はす敬語のごときはこの国の言葉の短所ではなくて、むしろ一つの特徴である〉と言ったこと。さらに〈書く文字と話す言葉とを一致させねばならないといふことはなからう、なせならば耳で受け取るのと目で受け取るのとは全然違ふから〉、たとえば〈文字と口語との一致から出発するとしても、言文また再びこゝに分化するのではないか〉などといったようなことを紹介する。そして藤村は、この金田一氏の発言を受けて、我々が散文に志した頃〈どこまでも口語の通りに書くことを願ひとし、また、それを新しい欲〉とした、そのことによつて〈多くの変化をすら見出した〉、けれども、この試みは〈事物を叙するにいさゝか長きに失し、省略や切語の必要をも感じ、文章には文章の姿といふものもあつて、さう理論にのみ拘泥せず〉に書きたいと思うようになったと言い、冗漫になりがちな口語文の弊害を指摘する。だが、私は〈最初の出発点を大切に考へ、それを見失はずに、出来るだけ文章を口語に近づけようとするその方針に変わりはない〉と述べている。さらに、これと同じことが〈文字と言葉〉についても言え、その一致を考えても、必ず〈そこには分化の時を迎へて、一々発音通りに書くことの到底不可能なこと〉に思い至り〈文字の力が及ぶ範囲〉に踏み止まらう。それは

〈文字は作られるものであつても、言葉は成るもの〉であり、言葉には〈そのもの〉秘密に汲んでも汲んでも盡きないやうな源泉がある。私達は、平素〈言葉を粗末〉にし〈言葉を使ふことのみを知つて、言葉を養ふことをしない〉が、言葉というものは〈好い言葉ほど荒蕪に帰り易い〉ものである。藤村は国語の立場から、言文一致及び文字と言葉の一致について、限りなく近づける努力はするが、そこには、自ずから、やはり限界があり、分化は避けられないであろうと論じている。

また、藤村は言語の歴史を辿り、言葉は、人生の少年期、青年期、壮年期と同じように、上代、中世と花開き、爛漫に及んだ。その後も、漢字の使用は増々おこなわれ外来語にも随ようになった。前出の長谷川如是閑の話によれば、地方の言葉が中央に融合され、漢語が民間に流行したこと。文化の長い京都ですら、信長、秀吉の頃には、美濃尾張の言葉が上方語に入ったこともあると言う。藤村は、このように〈大河のやうに流れ動いて行く言葉の広さ〉を、私達は〈文字に書きあらはし得る範囲にはおほよその限りがある〉と語っている。そして私は、平素〈不用意の間に使用してゐる言葉のいろ／＼ある〉のに気づくが、どうして〈筆には上つて来ないのかと、自分ながら左様に思つて心ひそかに驚く〉と述べている。さらに、言葉について〈高い調子の形容詞〉などは避け〈成るべく的確に物を言ひあらはしたい〉、かえつて〈日常生活の間に養はれるやうな小さな言葉の中にも多く隠れている〉と考える。藤村は、言葉、国語の歴史の考察から、言葉の広さ、多様さを知り、作家でありながら、それ等を充分に使いこなすことのない自分を嘆く。同時に、高い調子の形容詞でなく、的確で適当な良い言葉は、日常生活の中にあると深く認識する。

次いで後半部、国語問題の第二として、漢字を整理して、外国人の日本語の学び難さ、習得の困難さを救うことを挙げる。藤村は、日本に漢字が移植される以前の大陸の状況、日本で漢字が盛んに行われるようになった背景と根拠について分析する。そして俳諧の文字が、平談俗語を詩歌に導き入れたと言われているが、漢字もまた〈外来の客とも思はれないまでに吾国の詩歌と結びついた〉と指摘する。従つて、すでに長い間親しみを持つ〈平素わたしたちが使用するほどの漢字は、むしろ進んでこれを国字の一部と考へてい、時がやつて来たかに思はれる〉と述べている。試みに、〈「寒天」〉という熟語は〈さむぞら〉であるが、それを〈「寒空」〉と書いたとしても、国語としての用に役立つ、つまり〈体そのものは漢語でも、用はすでに国語である〉。このようなことから〈もし言語を先にし、文字を後とし、国の言葉で思ひ出せるのは成るべくそれを文字にも書きあらはすとしたら、漢字もまた国字として生きて来る〉のではなからうか。そして、この〈眼に見る象形文字〉と、〈口に語り耳に受け取る音標文字〉の二つを有するのは日本人の運命で、そのため〈象形文字の扱ひにも徹し得ず、また音標文字の扱ひにも徹し得ない〉が、けれども〈西洋の人達なぞが行かうとしても行き得ない言語と文字との深い綜合にも至り得る〉かと思う、と論じている。この長文の国語論の最後で、藤村は〈何と言つても国語の問題が

言語の教育にまで進んで来たことは歡ばしい現象であり、今後は〈その自覚の上に立つてであらう〉と言う。従来の教育は、ただ〈読むこと、書くこと〉のみで〈口に発し耳に聞く〉言葉はなおざりにされて来たが、その誤りを正し〈話し方〉の必要性を教え、国民性の欠点を指摘し、広々とした世界の方角に向かうことを教えてくれた言語の新教育である、と述べる。そして〈実際、今の時はこの国の言葉を整備して立派な良い言葉に伸ばして行くといふことが大切だ〉と再び言葉の重要性を訴え、論文を締め括っている。

昭和十六年に執筆された論文だが、この結論の部分は、今日の、国語、言語、文学教育に大いに共通するところがあり、誠に興味深い。

明治・近代は、政治、経済、全ての組織の改変の時代であるが、文章、文学もまた、その近代の改良、改革の波に晒されたことは言うまでもない。繰り返すことになるが、藤村は、明治三十年中頃まで日本に於ける詩の創設に精力を注ぎ、果して、日本語で詩が書けるか、書くためには、という命題と格闘する。三十年代後半から、詩に別れを告げ散文家を目指すようになるが、詩創作の経験から、なおかつ言語の愛を大切にと言い、言文一致運動も、この言語の愛が支えとなって起こったものであると力説する。新しい時代には、新しい文体が必要であるが、そのために言語も新しくしなくてはならない。逆説的に換言すれば、新しい言語が新しい文体を作り、新しい思想を生み出すと考えている。二葉亭四迷、尾崎紅葉の言文一致の文章を、嘗てない現実性の高い文章と評価するが、藤村の場合は、言語・文章・思想は一つであるという、詩人らしい言葉の重要性を基底に置いての意見である。

やがて藤村の思索は、文章論から小説の描写論に移っていくが、言文一致の活動を考慮しつつも、藤村自身は「話し方」ではなく、むしろ絵画の技法を利用して、文章・描写の確立を試みる。まさに「写実」というより「写生」なのである。雲の観察記録や自然と生活風景のスケッチ等は、当時にはない独自の文章修業の方法と言える。それはまた、画家と同じように観ることに始まり、局部から全体に至るように、そして表面のみに止まらず、物事の「真」に近づき「生」を写すというものであった。『千曲川のスケッチ』は、一見、平易な言葉、柔らかな文章と思われるが、熟読してみると、実は細かく鋭い観察の上に立った作品であるとわかる。この鋭い観察が、口語文の陥りがちな冗漫な文章になることを回避させ、省略のきいた簡潔な文章を成り立たせているのである。内容面に於いては、単なる自然でなく自然の優しき厳しさを、単なる生活風景でなく、そこに生きる人々の孤独感や遅しさにまで、奥深く筆が届いているのである。

そして、この観察「観ること」に於いても、定まった観かたを離れ、先入観に捉われない観かたをすることによって、新しい発見、新しい進路が開けてきて、特有な社会観が抱けるようになって考えている。それはまた、晩年の素直な心で文章を書くという、易しそくに思われるが、し

かし高次元の文章論に到達するのである。先人観から脱す、既存の思想を越える、その思想は、いわゆる哲学の「現象学」に近いというような大層なことを言う気はないが、徳川・江戸三百年と決別し、近代という新時代を構築するために、何事に於いても、是非とも必要な思考・思想であった。

このように、詩人として言葉を追求し、散文家として文章を追求して来た藤村は、最晩年に日本語という国語・言語教育についてを論究するに至る。藤村は、実は、詩創作からのみでなく、外国留学が日本語への愛を深めたこと。シトボルトが、日本語は文化の高い記号であると指摘したことなど。それら海外との交流を持つことによって、今までにない日本語の特質を明確にすることが出来た。世界的な視野からみれば、もともと言葉と文字との差の著しい日本語にあって、そんなに言葉と文章を一致させることはない。仮にそうあっても、本来は別なのだから、やがてまた分化することになると言う。その言葉通り、明治初期の言文一致活動は「話すように書く」であったが、この文章創作理論に飽き足らず、昭和に入って川端康成、横光利一等の新感覚派を中心に、文章を「書くように書く」という日常より芸術性を求めた文章運動が起こり、成功を治めている。

また日本語には、眼に見る象形文字と口に語り耳に受ける音標文字の二つがあり、どちらにも徹し得ないでいるが、けれども、それは西洋の人達が行き得ない言語の総合に至り得るかも知れないと言う。これは詩歌に於ける律の問題、リズムとイメージに通じるもので、そのような意味では、変化に富んでいる日本語は、詩歌の世界で飛躍的な言語芸術を作り出す可能性もある。さらに、この言文一致の立場から、従来は、「読むこと書くこと」のみで、「話すこと聞くこと」がないがしろにされてきた。「読む書く」に「話す聞く」を取り入れることによって言語教育は広がるという指摘は、或いは、前出の二葉亭四迷の文章修業の転用かとも考えられるが、遠く、偶然に現在の国語・言語・文字教育の目標「読み・書き・聞き・話す」の方向性と一致しており、卓見といわざろう得ない。

見てきたように、明治の言文一致運動は、主として「話す」からの文章改良であったが、藤村の場合は、全て「言葉」に原点を置いた、絵画の手法を取り入れての、「観る」からの文章確立である。そこが、他の作家と異なる特徴で、優れたところである。島崎藤村は、詩人か小説家かという幼稚な問いを発するつもりはないが、敢えて言うならば、時間的、量的には圧倒的に小説家であるが、しかし生涯を通して、言葉の新しさを求め、言語への愛を訴え続けたという点に於いて、本質的には真の詩人であったと言える。

注

- (1) 『小説神髓』(明治十八年九月く十九年四月・松月堂刊)
- (2) 「小説総論」(『中央学術雑誌』明治十九年四月)
- (3) 『当世書生気質』(明治十八年六月く十九年一月・晩青堂刊)
- (4) 『浮雲』(明治二十二年七月く八月・金港堂刊)
- (5) 「余が言文一致の由来」(『文章世界』明治三十九年五月)
- (6) 「韻文について」(『太陽』明治二十八年十二月)
- (7) 「緑蔭雑話」(『読売新聞』明治三十九年四月九日)
- (8) 「言文一致の二流派」(『文章世界』明治三十九年五月)
- (9) 「口語と詩歌の一致について」(『アルス新聞』大正十四年三月二十日)
- (10) 「写生」(『文章世界』明治四十年三月)
- (11) 「日記」(『新片町より』明治四十二年九月二十二日・佐久間書店刊)
- (12) 「観ることと書くこと」(『後の片町より』大正二年四月二十五日・新潮社刊)
- (13) 「すなほな心」(『模範綴方全集』第一巻・昭和十四年五月二十日)
- (14) 「国語問題覚書」(『国語文化講座』第二篇「国語概論篇」昭和十六年十一月十五日・朝日新聞社刊)